

## 歴史文化クラブ 12月研修会

「地元史の深掘りと座学」 中井 弘

12月20日(火)、西大寺駅北口に23名が参集した。小さな雨粒が落ちてくる中、平城宮跡に向けて出発する。暫くして歴文日和に回復する。

まず佐紀幼稚園裏の隆光大僧正の墓所を訪れる。しかし、みすぼらしい墓である。失脚した隆光の晩年の立場が読み取れる。

歴文会員の岩本先生から解説を聞く。

隆光は慶安2年(1649)ここ超昇寺村の川邊家に生まれた。長谷寺などで学んだ後37歳で将軍家の祈禱寺である江戸知足院(護持院)の住職となる。五代将軍綱吉の信頼を得て大僧正にまで登りつめるが、綱吉は悪名高い「生類憐みの令」を出し、世間ではその背後に妖僧隆光がいたと噂した。岩本先生は隆光の破格の抜擢に対する妬みがあったとしている。隆光は綱吉と生母桂昌院に働きかけ、松永久秀の兵火で焼失していた東大寺や唐招提寺、法隆寺、室生寺など多くの古刹再建に貢献した。奈良の大恩人であるという。

平城宮跡のほぼ全域が特別史跡として保存され、2010年の平城遷都1300年には大極殿が完成した。世界遺産にも登録されるが、礎を築いたのが植木商・棚田嘉十郎、宮跡の地主・溝邊文四郎、山下鹿蔵たちであった。嘉十郎は私財を投じて家産を傾けてまで宮跡の保存運動に奔走するが、宗教団体がらみの土地買収トラブルに巻き込まれ世間の糾弾を受け絶望、大正10年に自決する。

・嘉十郎辞世の句:「つくしても つくしきれない君のため 心きめるは きょうかぎりかな」

佐紀町に住んでおられる溝邊文四郎のご子孫・溝邊文昭氏、山下鹿蔵のご子孫・山下常治氏のお宅を訪ねた。

明治からの保存活動が判る多くの日記、書簡、徳川侯爵の感謝状、平城京址大内裏地図、宮跡の古地図・図面、写真、棚田嘉十郎の辞世句の掛け軸など、素手で触ることが憚れる貴重な資料が用意されていた。奈文研の研究者が泊り込みで調査、データ化して資料館に保存されているという。

・溝邊文四郎の句:「平城の野にみやしろは たつ

はなし 世に富む人はあまたあれど」

次に水上池ほとりにお住いの、川邊康雅氏のお宅を訪ねる。藤原房前の子、魚名にはじまる系図を拝見する。隆光(川邊隆長)の名も記載されている。康雅氏はれっきとした藤原氏の流れであり隆光のご子孫であることが分かる。壁に掛けられた超昇寺村の古地図も興味深い。



川邊邸を辞して水上池の東南角に出る。古川さんはここから往時の宮庭庭園松林苑の地形が認められると言う。聖武天皇がしばしば宴を開かれ、薬苑、菜園、狩場があった。最近の調査で東西1.8km、南北1.3kmの大庭園であったことが判明し、近年それを取巻く築地堀の一部がこの辺りで榎考研によって発掘された。今は新興宗教の建物に埋め戻されている。

座学は佐保川ふれあい会館で午後から行われた。

吉川利文氏の演題は「ジャーナリストから僧籍へ」。31年間社会部系の取材記者で多くの事件を手がけられた。凶悪犯罪の取材や死刑囚の処刑執行の現場など生々しい話。死者への鎮魂の思いから「死者はどこへ行った」を究明するため、佛教大学で3年間学び僧籍を取得された。

岩本次郎氏は「平城宮跡保存の原点を探る一北浦定政と棚田嘉十郎一」。北浦定政は古市奉行所役人・山陵研究家で「平城宮大内裏跡坪割之図」を著わし、これが平城京研究の基礎となる。

棚田嘉十郎は大極殿跡が牛糞の施肥場と化しているのに慨嘆。それが活動の原点となったという。

今回の地元史深掘りは地元の鈴木会長の人脈もあって興味深いテーマとなった。東笹鉾町の棚田、佐紀町の溝邊や山下など地元市民による保存顕彰運動が、今日に繋がったことを忘れてはならない。